知る、つながる、好きになる ながおか市民活動情報誌

ちこって

2021
9
Vol.105
TAKE FREE

ボランティア活動が私たちにもたらすもの

特集
光野（こうの） 颯斗（はやと）さん ／ 深滝 健太郎さん ／ 大橋 利生さん

NAGAOKA PLAYERS
春日 惇也さん

長岡みんなのSDGs
長岡おもちゃ病院
株式会社 ナンバ

市民活動・虎の巻
「やりたい」をカタチにする企画づくり - 導入編 -

ながおか市民協働センター

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

長岡みんなのSDGs

SDGsは、2030年までに世界の様々な社会課題の解決を目指す17の目標。
世界で取り組むSDGsにも、地域で取り組む市民活動にも、「誰一人取り残さない」という同じ想いが込められています。

詳しくはこちら

12 つくる責任 つかう責任 — おもちゃを蘇らせて廃棄物を削減！

長岡おもちゃ病院

長岡おもちゃ病院は、2008年におもちゃドクター養成講座を受講したメンバーで設立し、子どもたちにものを大切にする心をもってもらうため、壊れたおもちゃを修理しています。毎年500～600件の修理依頼のうち95%を完了させており、廃棄物の削減につながっています。これからも、治療したおもちゃを渡す喜びと笑顔に出会えるよう、1つでも多く大切なおもちゃを完治させていきたいです。

13 気候変動に具体的な対策を — フロン漏洩の早期発見で地球温暖化防止に貢献

株式会社 ナンバ

冷凍空調設備の設計、施工、メンテナンスをしている会社です。冷凍空調では欠かすことのできないフロンガスは温室効果ガスの一つで、大気中に漏洩すると地球温暖化の原因に。私たちは、そんなフロンガスの漏洩を早期発見する「フロンキーパー」を自社開発し、地球温暖化防止に取り組んでいます。今後は、日本国内はもちろん世界的にもフロンガス漏洩削減に貢献していきたいです。

市民活動・虎の巻 /// 研究テーマ /// 「やりたい」をカタチにする企画づくり -導入編-

皆さんはどんな風に企画を考えていますか?「やりたい!」という気持ちはもちろん大切ですが、それだけでは良いものになるとは言えません。
どのように考えていけば、求める成果を得ることができるのか、今回から3回に渡って企画のつくり方をお伝えします。

魅力的な“企画”の条件

- ✔「対象（受益者）」が明確
- ✔ 対象にとって「参加する動機」がある内容
- ✔ 参加者が得られることが明確

残念な“企画”の例

- ✘ 対象の姿が想像できない
- ✘ 運営側の独りよがりな企画
- ✘ 一言で説明できない企画

企画の基本の3要素

企画を考えていくときに、念頭においてほしい項目です。これら3つに社会情勢やトレンドなどを盛り込むことによって、より企画の効果や成果を高めることができます。

1 対象（誰に） → 2 内容（何をするか） → 3 効果・成果（どうなってほしいか） → 広報&実施へ

プラスアルファ +α 対象の悩み・課題・欲求、社会情勢、トレンドなどその企画の根拠

MEMO
次回10月号では“対象”から考える企画方法、
11月号では“内容”から考える企画方法を2号に渡ってお伝えします！

企画づくりをサポートする「アイデア整理シート」を、ホームページからダウンロードいただけます。ぜひご活用ください。

センターからのお知らせ

団体運営のテコ入れに! プロに相談しませんか?

労務 税務 **出前相談** 会計 法人設立

活動団体の組織運営能力アップを目指して各団体のニーズに合わせた講師を無料で派遣します。この機会に団体のお悩み解決、スキルアップを図りませんか?
ヒアリングの後、派遣する専門家を決定します。まずは協働センターまでお問い合わせください。

対象	長岡市内のNPO法人、市民活動団体など公益的な活動をしている団体
募集数	3団体（先着順）
申込期間	2022年2月末まで随時受付
派遣できる専門家	・会計士、税理士　・社会保険労務士 ・弁護士、行政書士　・IT専門家

ちこって 2021.9.1 vol.105 TAKE FREE
発行／ながおか市民協働センター

〒940-0062 長岡市大手通1丁目4番地10　シティホールプラザ アオーレ長岡 西棟3F
Tel.0258-39-2020　Fax.0258-39-2900　Mail.kyodo-c@ao-re.jp　URL.https://nkyod.org

配布場所　長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。

つながるラジオ　FMながおか80.7MHz　毎週月曜17時頃～
「NAGAOKA PLAYERS」と「長岡みんなのSDGs」を放送中!

市民活動のポータルサイト コライト

要チェック! タイムリーな情報と協働センターの日常
@NkyodoCenter　@nagaoka_kyodo　@nagaoka_kyodoc

「ボランティア活動が私たちにもたらすもの」
誰かを想うやさしさは、社会全体のやさしさへ

今、私たちのまちが抱えている様々な課題に、それぞれの特性を活かして向き合い続けている市民活動プレイヤーをご紹介します。今月のテーマは、「ボランティア活動が私たちにもたらすもの」。誰かのために無償で行われるボランティア活動は、活動者自身や私たちの社会に何を与えてくれているのでしょうか。

子どもの見守りや地域の美化運動など様々な活動を支えるボランティアという存在。一般的にボランティア活動とは「自発的に、他の人や社会のために無償で行う活動」を指します。公平・公正を基本とする行政では対応が難しい青少年の健全育成や福祉、環境保全など様々な分野において、その働きが期待される一方、労働の対価がお金で支払われる社会において「タダ働き」「無償労働」と言われてしまうことも。しかし、ボランティア活動はお金には代えられない大切なものを活動者に与えてくれます。

自分を好きになるきっかけ
～光野（こうの） 颯斗（はやと）さんの場合～

「もし僕がボランティア活動をしていなかったら、家にこもり就職もしていなかったかもしれません」と話す光野颯斗さんは、元々内向的な性格で、子どもと関わるボランティア活動に興味がありながらも、それは女性がするものという考えから周囲の目が気になり、行動に移せずにいました。しかし大学3年生のときに、自分と同じ男子大学生が子育ての駅「ぐんぐん」でボランティアをしていると新聞記事で知り、勇気を出して「ぐんぐん」での子どもの見守りや子ども食堂での学習ボランティアに挑戦。「親御さんから『ありがとう』と言われると、人目を気にする必要はないんだなと思ったと同時に、自分の存在が認められたような気がして自己肯定感が上がっていきました」。少しずつ性格が外向的になり、もっと色々なことに挑戦したいと保育園でのインターンシップにも参加したそう。就職し会社員として忙しく働く今も、「ぐんぐん」でのボランティア活動を続けています。

「ありがとう」と言われること
～深滝 健太郎さんの場合～

深滝健太郎さんは、ほぼ毎日5～30分ゴミ拾いを行い、それ以外のときでもゴミを見かけたら拾う生活を約9年間続けています。好きな俳優の「ゴミを拾ったり、電車でお年寄りに席を譲ったりするのが本当のかっこよさだ」という言葉に感銘を受けて始めたゴミ拾いでしたが、続けるうちにゴミが環境に与える影響に興味をもつようになり、今は将来を生きる子どもたちのために活動を続けているそう。「人間として生まれたからには、人の役に立ちたい。ゴミ拾いという身近な活動が、持続可能な社会づくりにつながればいいなと思っています」。やりがいは、ゴミ拾い中に道行く人がかけてくれる「ありがとう」の言葉。中にはわざわざ車を停めて話しかけてくれる人もいて、その一つひとつが活動を継続する糧になっています。

広がっていく人とのつながり
～大橋 利生さんの場合～

大橋利生さんは、中之島にあるみずほ団地で花壇の整備をしている「みずほ花華会」のメンバーです。以前は一人で花壇を整備していましたが、徐々に一人で活動することに限界を感じるようになり、声をかけてきてくれた花華会のメンバーと一緒に活動するようになりました。「きれいな団地に住みたい」という同じ想いをもったメンバーと作業することで、活動に張りが出たと言います。「仲間ができただけではなく、水やりなどで家の外に出ることで、ご近所の方と顔を合わせたり声をかけたりする機会が増えました」。花壇で作業していると、散歩している人や自転車に乗っている中学生があいさつをしてくれたり、同じように花壇をきれいにしている他の町内の人と話したり。ボランティア活動を通して、人とのつながりが広がっています。

ボランティアは暮らしの豊かさを育む

このように、ボランティア活動は活動者に、自身の成長や、人の役に立っているという実感、人とのつながりなどお金では買えないものをもたらしてくれます。そしてその活動は、国や自治体などの政府や企業では担えない役割を果たし、私たちの生活をより豊かにしてくれています。

ボランティア活動の特徴は、機動性や多様さ、そして先駆性。「全体の奉仕者」として常に公平さを求められる行政は、課題に対して取り組む際、全体をくまなく把握することや住民の賛同が得られる最大公約数的なサービスを提供することが求められるため、対応が遅れるだけではなく、その対応も保守的なものになりがちです。一方、ボランティア活動は、市民の自発性によって行われ公平性を求められない分、目の前の課題に素早く柔軟に対応することができます。

また企業は常に利益を追求するため、収益の得にくい分野で活動するのは難しいもの。その点において、利益を求めず参加者の自主性によって行われるボランティア活動は、企業では取り組みにくい社会課題の解決に寄与できます。

私たち個人にも、社会にとっても有意義なボランティア活動。みんなが誰かを想うやさしさを少しずつ行動に移していくことで、社会に素敵な循環を生んでいきたいですね。

【参考文献】
「市民社会の創造とボランティアコーディネーション」
特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会　編
早瀬 昇・筒井 のり子　著

ボランティアの受け入れ先や
ボランティア活動に役立つ
情報を掲載中!

コライト特集ページは
こちら

ウワサのあの人にインタビュー！

NAGAOKA PLAYERS

地域復興支援と生ハムづくりに見出した意外な共通点

春日 惇也さん（36歳）
越後川口生ハム塾

1984年山形県生まれ。ラジオの愛聴者で、今年FMながおか内に自身のレギュラー番組を持つ夢が叶った。

春日惇也さんは「越後川口生ハム塾」を企画運営しています。塾では参加者が生ハムのオーナーとなり、最初の製造工程である血抜きと塩もみの作業を体験。その後約1年半の発酵、熟成を経て完成となり、参加者の手に渡ります。2015年の設立から今年で7年目を迎え、県内外からのべ約500名が参加しました。

なぜ、春日さんが川口地域で生ハムを作るようになったのか。それは2004年に起きた中越地震までさかのぼります。地震発生時は長岡造形大学に在学中でした。2007年の中越沖地震も含め、いくつかのボランティア活動に従事してきた春日さんはその後、川口の復興支援員として配属されたことで、地域とより深く関わるようになりました。

住民と話し合ったり、地域の再生に向けた事業の手伝いをしたりすることが活動の中心。少しでも地域の助けになればという一心で関わりを続けてきましたが、復興が進んでくると地域の自立につながる活動が求められ、自らの置かれる立場に悩む時期もありました。

震災から10年目を迎えたとき、支援員である自分たちも地域の中で楽しめることを始めたいと考えるように。そこで、ジビエ（野生鳥獣の食肉）の取り組みをきっかけに出会ったシェフの助言で、「越後川口生ハム塾」をスタート。参加者や協力者とのつながりから他地域でのイベント出展、コラボレーション事業などが多方面に広がり、多様な交流が生まれました。「ヨーロッパにおいてハムやソーセージは日本の漬物のような存在に近く、昔は家庭ごとに作られていたそうです。集落のばあちゃんたちのお茶飲みに漬物があるように、生ハム塾の生ハムもみんなが楽しく集まるときのちょっとした話題の一つになれたらいいなと思っています」。

今年3月、地域復興支援員としての役割を終えましたが、これまでの経験とつながりを活かし、今も毎日川口に通って活動を続けています。「今後も生ハムと川口地域との魅力を組み合わせた企画をやっていきたい」と夢を語ってくれました。